

総論

満点	40点	目標得点	30点	試験時間	60分	偏差値	73
大問数	5	小問数	35				
【解答形式】		選択式	34/35問	記述式	0/35問	論述式	1/35問
【問題難易度】		C	5/35問	B	15/35問	A	15/35問
※問題難易度：C 難問、B 合否を分ける問題、A 正答すべき問題、を示す							

Topics

- 1：例年通り、選択問題による大問4題と200～250字の論述問題が1題の大問5題による構成
- 2：問題の大半を占める正誤判定問題は問題ごとの難易度の差が大きい。平易な問題から確実に得点していく。
- 3：論述問題も昨年と同じく近現代史からの出題。指定語句をヒントに論述の骨格を構成していけば十分に対応可能。

こんな力が求められる！

【前年度合格最低点（3科目）】91.0 ※偏差値法による修正後の得点（得点率60.1%）

【前年度受験者平均点】25.67 ※素点（得点率64.2%）

昨年度と同じく、大問Ⅰ～Ⅳは正誤判定問題中心のマークシート式、大問Ⅴは近現代史の論述問題（200～250字）という構成であり、問題の難易度も昨年並みと思われる。従って、今年度も65%前後の受験者平均点が予想される。早稲田大学の場合、偏差値法を用い、受験者平均点=50%の得点（世界史の場合だと20点）に換算されるため、受験者平均点と同じ65%の得点では合格ラインに達しないのである。よって、平均点+10%程度（すなわち75%くらい）の得点を稼ぐ必要がある。では、今年度の問題でどのような力を身につければ75%の得点に達するのかを考えていこう。

まず、論述を除く34問中、非常に細かい知識や高等学校の学習範囲を超えていると思われる知識を問う難問は5問程度に過ぎない。この5問が答えられなかったとしても80%以上の得点率になるため、難問を解く必要は全くないといえる。では仮に残りの29問を全て正解し、論述に全く手をつけなかった場合はどうなるだろうか。論述の予想配点から考えるとこの場合、40点中29点となり目標の75%を若干下回ってしまう。従って、大問Ⅰ～Ⅳの基本的な問題をできる限りノーミスで解き（難問を含む34問中27問くらいの正解が望ましい）、大問Ⅴの論述で半分くらいの部分点を確保することで合計30点に達するというのが、現役生にとっての現実的な戦略であろう。

上記のことから、本学部を第一志望とする者は、

- ①基本的な問題をすばやく確実に解く（論述に必要な時間を確保するため）。
- ②論述は近現代史中心の傾向があるため、19～20世紀の範囲に関しては用語や流れをインプットするだけでなく、基本的な用語を使ってアウトプット（文章化）できるようにしておく。

といった力が要求されることを常に意識して普段の授業に臨んでおくこと。

【I】

予想配点	8/40 点	時間配分の目安	10/60 分
出題分野・テーマ	前近代の中国史		
出題形式	正誤、選択式		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 設問1：C 設問2：B 設問3：A 設問4：B 設問5：B 設問6：B 設問7：B 設問8：A		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3月期②3, 4回 ・ 4月期1, 2, 3回 ・ 6月期3, 4回 ・ 夏期講習「近代史」 ・ 12月期1, 2, 3回 		

●本大問の特徴・概要

昨年度と同じく、大問Iは前近代における中国史からの出題である。全て四択正誤判定問題だが、センター試験と比較して各選択肢の文章が長いため、時間がとられがちである。ここでのタイムロス後の論述問題の完成度にも関わるので中国史は人名や事件名などの歴史用語がどの王朝の時代に当てはまるのかを即答できるようにしておきたい。

●注目すべき小問

設問1（C：難問）

一見、誤っている選択肢が存在しないのでは？と考えてしまう問題。大問Iの1問目から難易度の高い問題かつ、受験本番独特の緊張感とで混乱した受験生も多かったのではと思われる。こういった時こそ我々が小学生の時からテストの際の鉄則として教えられている「難しい問題は後回しにして、簡単な問題から解く」といったお約束を実行するべきではないだろうか。ちなみにこの問題を解く際のポイントになるのは、「春秋戦国時代に関する」と出題者が時代を絞っている点である。周代の中国で実施された封建制は西周時代（≠春秋戦国時代）に維持されていたが、封建制の副作用として起こった地方分権的傾向が顕著となる東周時代には崩壊していた。

設問4（B：合否を分ける問題）

御史大夫は司法担当ではなく、官吏を監察する長官を指す。中国に限らず広大な領域を持つ帝国は、遠隔地での反乱や分離独立が起こらないよう細心の注意を払う必要が生じるため、洋の東西を問わずアケメネス朝ペルシアにおける「王の目・王の耳」やフランク王国における巡察使などの監察担当が存在していた。

設問5（B：合否を分ける問題）

呉楚七国の乱が勃発した時の皇帝が景帝であることは早稲田を受験する者にとっては必須事項である。この問題を間違えると命取りとなるので確実に得点したい。

設問7（B：合否を分ける問題）

官吏登用法に関する問題は極めて高い確率で出題される。郷举里選（前漢から）→九品中正（魏から）→科挙（隋から）といった基本的な流れはもちろん、「蔭位の制」や「進士」といった科挙に付随する知識も加えておきたい。

【Ⅱ】

予想配点 9/40 点	時間配分の目安 7/60 分
出題分野・テーマ 東西の文化交流	
出題形式 正誤、選択式	
小問別難易度 ※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 設問1：B 設問2：A 設問3：B 設問4：B 設問5：A 設問6：A 設問7：A 設問8：A 設問9：A	
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連 ・3月期②1回 ・4月期2,3回 ・6月期3,4回 ・12月期1,2,3回	

●本大問の特徴・概要

東西の文化交流という現役生にとって敬遠がちとなるテーマのように見えるが、一問一答形式の問題が多く、早稲田大学には平易な問題である。センター試験や他の私立大学でもよく見られる「同時代の横のつながり」に対する理解が試されるが、今回の場合はこの「横」に日本を含んでいる。日本史と重複する範囲を試験直前期にでも一度確認しておくと同様のように得をすることもできる。

●注目すべき小問

設問1 (B：合否を分ける問題)

女真文字は金の完顔阿骨打の治世時に契丹文字と漢字をベースとして作成された文字であるのに対し、ウィグル文字のルーツは古代オリエントのアラム文字に由来する。前12～前8世紀ごろ、シリアのダマスカスを拠点として内陸貿易に従事したアラム人の使用したアラム文字は後の中央アジアやモンゴルで使用される文字(ソグド文字、突厥文字、ウィグル文字など)に影響を与えた。アラム文字から派生する諸文字は確認しておきたいところである。

設問3 (B：合否を分ける問題)

茶は大航海時代が一段落する17世紀にポルトガルに代わってアジア方面に進出したオランダ商人の手によって中国からヨーロッパへもたらされた。この影響を受け、17世紀以降のイギリスやフランスではコーヒーサロンやカフェといった社交場が誕生する。大航海時代以降の「近世史」(教科書・テキストによっては「近代史」と表記)は特に法・商・政経といった社会科学系統の学部ではよく出題されるのでこれらの学部を志望する者は特に注意しておく必要がある。

設問4 (B：合否を分ける問題)

正倉院は法隆寺ではなく東大寺の宝物倉であるという受験日本史の知識が要求されているが、これを知らなかったとしても「聖徳太子が法隆寺を建立した」という基本的な知識があれば、後は「聖徳太子が小野妹子を隋に派遣した」→「小野妹子は隋の煬帝のもとへ国書を持参した」→「ということは聖徳太子と煬帝はほぼ同年代の人物であろう」→「隋の成立年代は581～618年である」→「従って、聖徳太子は6世紀後半から7世紀前半の人物ということが推測されるから法隆寺の建立が8世紀というのはあり得ない」という展開で解答を導き出すことができる。こういった応用力が身につけていると、日本史に関連する今回のような問題のみならず、世界史でもよく出題される同時代における他地域との関連(いわゆる「横のつながり」)を問う問題に対して自信を持って解答することができるようになる。

【Ⅲ】

予想配点	9/40 点	時間配分の目安	9/60 分
出題分野・テーマ	西欧諸国の国家形成		
出題形式	正誤、選択式		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 設問1：A 設問2：A 設問3：B 設問4：B 設問5：B 設問6：A 設問7：B 設問8：A 設問9：A		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	・5月期1, 2, 3回 ・夏期講習「西洋史5つのテーマ」 ・10月期1, 2回		

●本大問の特徴・概要

大問Ⅱとは異なり、西洋史に特化した問題構成となっているが難易度は大問Ⅱ同様、早稲田にはは解きやすい問題が並ぶ。今年度の問題に関してはこの大問Ⅱ・Ⅲをミスなく解けたかが合否の分かれ目になったであろう。なお、今回は出題されなかったが、法学部らしい中世ヨーロッパにおける法制史からの出題という13世紀のイギリスで展開されたマグナ=カルタから模範議会成立までの王権とそれに抑止をかけようとする勢力との対立に関する分野が考えられる。志望学部に関連するテーマは確実に押さえておきたい。

●注目すべき小問

設問4、設問5、設問7（B：合否を分ける問題）

これらの設問を正解するためにはハインリヒ5世（設問4）、フィリップ6世、（設問5）、神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世（設問7）に関する知識を必要とする。いずれも教科書にあまり記載されていない人物であるがヴォルムス協約、英仏百年戦争、ロンバルディア同盟といった基本的な事項を学習する過程で一度は目にしたことがあるはずである。図説（史料集）の巻末には付録としてヨーロッパ諸国における君主の系図が記載されている。主要な君主が何世紀に即位しているか、他国のどの君主と同時代の人物なのかを把握する上で絶好の教材である。

【Ⅳ】

予想配点	8/40 点	時間配分の目安	8/60 分
出題分野・テーマ	フランスにおける宗教と国家との関係		
出題形式	正誤、選択式		
小問別難易度	※問題難易度：C 難問、B 合否を分ける問題、A 正答すべき問題、を示す 設問 1：C 設問 2：B 設問 3：C 設問 4：A 設問 5：B 設問 6：C 設問 7：A 設問 8：C		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	・7 月期 3, 4 回 ・夏期講習「近代史」「現代史」 ・10 月期 3 回		

●本大問の特徴・概要

近代フランスにおける国家権力とカトリック勢力との関係を題材としたテーマ史。宗教協約（コンコルダート）の内容に関する問題は高等学校で学習する世界史の範囲を明らかに逸脱しており、今年度の問題の中では最も難易度の高い大問であろう。総論の箇所ですべてのように受験者平均点を基準とした得点調整が行われる関係上、難問を解けなかったことが不合格に直結することはほとんどないと考えてよい。従って、この大問Ⅳを見て、危機感を覚えてフランス史に関するテキストや用語集に記載されていない用語を重箱の隅を突くかのごとく丸暗記する必要はない。

●注目すべき小問

設問 3、設問 6、設問 8（C：難問）

いずれも高等学校の世界史の学習内容を越えた内容。上述の通りこの 3 問を全て間違えたとしても全く気にする必要はない。ここで必要以上に考えて時間を取られると、この後の論述問題に支障をきたすこととなる。

【Ⅴ】

予想配点	6/40 点	時間配分の目安	26/60 分
出題分野・テーマ	アメリカ南北戦争の背景		
出題形式	論述式（200～250 字）		
小問別難易度	※問題難易度：C 難問、B 合否を分ける問題、A 正答すべき問題、を示す 設問：B		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	・夏期講習「近代史」 ・冬期講習「アメリカ史」		

●本大問の特徴・概要

アメリカ合衆国の南北戦争における北部と南部の状況やお互いの主張の違いを 200～250 字で記述する問題。論述問題として頻出のテーマである上に、両者の違いはお茶ゼミのテキストのみならず様々な教科書等で比較してまとめられているので与しやすい問題ではあるが、字数の多さや指定語句「産業革命」の使用にとまどうと時間切れになる可能性も十分に考えられる。箇条書きで両者の状況をテーマごとにまとめ、残り時間と相談しながら全体の流れに無理のないような形で指定語句を組み入れて文章にしていく、というのがオーソドックスな解き方かと思われる。この文章を読んでいる受験生諸君はまずは時間を気にせず北部と南部の主張をまとめることから取り組んでもらいたい。

●注目すべき小問

設問が 1 問のみのため、上記の特徴・概要に同じ。